

コンチユバー様、わたくしの可愛いムディアダアはあの方と一緒にでは御座るません。

コンチユバー

ではお前は立ち去つて呉れ。

老婆(嘆願するやうに)

若しお話のやうに今宵ディアダア様がお出でになられますやうなれば、わたくしはお姫様に一日お會ひしたいのでござるます。

コンチユバー(おれつたさうに)

すぐに會へるよ。だがわしはラバーハムに用があるんだから出て行つてくれ。

右手より老婆を退場せしめんとした時、ラバーハム左手より登場す。

ラバーハム(疑ぐり深く彼女を見廻して)

おかしな所でお目にかゝりますのねえ。それからナイシ様や、その御兄弟方や、ディアダア様を妙な所にお泊めいたすでは御座るませんか？

コンチユバー

お前はすつとあれ等と一緒に來たのか？

ラバーハム

左様で御座るます。わたくしには結婚式であれ埋葬であれ、又その二つが同時に参りましても、旅をして参る要はないので御座るますけれど。(疲れたやうに坐る)あなたやわたくしのやうに老ひて行きますのは情ないことでは御座るませんか。コンチユバー様、あなたは何もこの夜寒にこのやうな所をおさまよいになられ、お命を縮められる必要はないとわたくしは存じます。

コンチユバー

俺はフアーガスが北で止められたかどうかを知りたいので待つておるのだ。

ラバーハム(益々鋭く)

止められました。確かに。わたくしはそれが今夜エメンと愛蘭と、そしてその東の廣い世界に禍を齎すあなたのお計畫であると思ひました。(彼に近寄る)ですけれどあなたはお部屋にお歸りになられ、長い道程を歩いて來られて埃にまみれ、汗ばみ、だらしなくなつてゐられるお姫様にお會ひになられて、お姫様にお恥をおかゝせ下さいますな。(嘲けるやうに笑ふ)あゝ、コンチユバー様、わたくしの愛しいお姫様は、森の中で美しさが疾うに去られました。それ故今夜あなたはディアダア様を御覽遊ばされた時、屹度深いお喘ぎをなされるでござるませう。

コンチユバー(荒々しく)

俺が姫を小さい時から育て上げたんだから、白からうが寝れておらうがわしは一寸も構はん。わし

は姫に何時會つても、又何時見ても少しも差支へない筈ぢや。

ラバーハム

お差支へがござるませんか？ 盲目に見る権利が、びつこに踊る権利が、又啞、唄 権利が御座るませうか？ あなたがディアダア様の唇に浮んでおる華やかさを御覽になられますのは、それに似た権利でござるませう。(宥めるやうに)お部屋にお出でになられ、そして一夜だけお姫様を休ませて上げて下さいませ。

コンチユバー(突然怒つて)

わしは行かない。わしは部屋でたゞ獨り長いこと西や東にふんぞり返つてゐたのだ。わしは恐らくミースの盜賊より窮乏してゐるだらう。……お前はわしを年寄で賢いとは思つてゐる。だが賢いものは年寄は死なねばならぬといふことを知つてゐる。そして死は打勝たうと決心したら、どんなことがあつても機會を逃すことはないのだ。

ラバーハム(うなづいて)

若しもあなたが年寄で賢うござるますなら、わたくしも同じやうに賢うござるます。コンチユバー様、あなたがお姫様を得るために人を滅し、神を裸になされる御用意をなさいましたも、それは無駄でござるませう。王様にも得られぬものが御座るます。コンチユバー様、今夜あなたがお暴れな

さいまして、多くの人を殺すだけでござるます。そして明方にはあなたのお顔は涙にぬれ、當惑の色で滿されるでござるませう。

コンチユバー

お前はしやべり過ぎる。(右手の方へ行く)オーウエンは何處にゐるのだ？ お前は何處か途中で彼に會はなかつたか？

ラバーハム

たしかにお會ひ致しました。あの方はナイシ様をお探りになつておられました。然し今頃は蛆うぢがあなたの方のお腹の中を探つておりませう。

コンチユバー(欣然として)

ナイシがあれを殺したのか？

ラバーハム

さうではござるません。ディアダア様の爲にお氣が狂つて、自殺をなされたので御座るます。お姫様のお物語りに出ますものは、馬鹿も、王様も、學者も、皆一つでござるます。オーウエンは、今宵あなた様がエメンでお演じになられる悪企みの最初の死者であるといつて、御自分を偉いものゝやうにお考へになつておられました。

コンチユバー

お前が最初の死者であるべきだ。だがウスナを嫌ふ藩からわしの所へ使の者がやつて来る。

ラバーハム(絶望的に後ずさりをして)

あ、神様、わたくし達すべてをお憐れみ下さい!

武器を手にした人々登場す。

コンチユバー(兵士等に)

エンリとアーダンはナイシと離れたか?

兵士

左様でござります。コンチユバー様。ディアダアの家を仕度するについて手が借りたいからと言って引き離しました。

コンチユバー

ナイシとディアダアはやつて来るか?

兵士

ナイシ様は慥に参ります。そして連の婦人は登る月、沈む太陽の輝かしさも及びませぬ。

コンチユバー(ラバーハムを見ながら)

お前は喉が齧だらけで醜いつて言つたやうらう?

兵士

尙お知らせいたすことが御座ります。(ラバーハムを指さして)この御婦人はあなたがナイシ様を此處にお連れするといふことを聞かれますと、北からファアガスをお呼びする爲め騎馬の少年を遣しました。

コンチユバー(ラバーハムに)

その爲にお前はわしを欺いておつたのだな。然しナイシが間もなく殺されるのを見るだけだ。(兵士等に)行つて戦士を呼んで来い。それからこの女をエメンに連れて行け。

ラバーハム

わたくしは此處に留りたいので御座ります。わたくしは出来るだけのことを致しました。けれど若しも死が近づいておりますのならわたくしが此處におりまして、お姫様のお世話をいたしますのは、好いことでは御座りませんか。

コンチユバー(烈しく)

この女をエメンに連れて行け。今日は彼女(カヘ)は非常にわしを欺いた。(兵士彼女の傍に行く)

ラバーハム

觸つてはいけません。(上衣で身體を包み、コンチュバーの腕をとらへる)わたくしはファーガス様があの方々のお側にお出でになられる迄、わたくしのお話であなたのお手をお止めして、コンチュバー様。あなたや、ナイシ様や、エメンをお救ひしやうと思つたのでござります。然しわたくしはあなたの御殿に参りませう。(身振を見せて)此處には蕁麻、あすこには薊やすかんほか生えるやうになりませう。わたくしはあなたが女の女王の接吻をお受けなされる爲、頸を伸したり嬌態を作つたりしていらつしやつた立派なお部屋に参りませう。此方では鹿がうろつき、羊が土をほぢくり、又彼方では北から強い風が吹いて來ると、羊が眼をさまして咳をするやうになりませう。(身をふり放す。コンチュバー兵士に合圖をする)きつと参ります。すぐにわたくしは多くの者と坐りながら、火のぼち／＼する音や梁の碎ける音を聞くでせう。それから又わたくしは、エメンの最後である大きな煙を見るでせう。(退場す)

コンチュバー(外を見ながら)

森の中に、人が二人見える。ナイシとデアダアに違ひない。(兵士に)あれ等に今夜こゝに泊るやうに傳へてくれ。

コンチュバー右手より退場。ナイシとデアダア左手より登場す。大層疲れてゐる。

ナイシ(兵士に)

俺とデアダアの爲にこの場所を用意しておいたのか？

兵士

レッド、ブランチの御殿は今風を通したり洗つたりしております。暫く致しましたらそこへ御案内致しますから、それ迄このテーブルの上の果物や飲み物を召上がつて下さい。では御機嫌やう。(右手より退場す)

ナイシ(あたりを見廻しながら)

彼の友として戻つて來たのに、妙な所に我々を泊めるぢやないか？

デアダア

カーテンの塵を拂つたり、立派なお部屋を片づけて、わたし達を歓迎するのでござるませう。あなたはあの方の姉様の子なんですから、あたし達を迎へるのに儀式張るのは當り前です。ござるませう。

ナイシ(ふさぎ込んで)

我々は玉座や、立派な部屋や、カーテンが欲しくはない。我々は羊齒や、冷い水のさら／＼と流れてゐる小川にばかり親しんでゐたのだからな。

デアダア(部屋の中を往つたり來たりして)

わたし達はエメンでわたし達の権利を要求するのでござります。(カーテンを見る)あの方はわたし

達の爲に立派なものをとつて置いて下されるかも知れませんが、わたし達を待たして置くこの部屋には、擦り切れた毛氈や蟲に喰べられた毛皮しかござりません。

ナイシ 稍性急に)

我々がエメンに歸つた最初の夜に、毛皮や蟲の心配をして呉れるものがない。

デアアダア(晴々しく)

わたくしがいつも心配しておつたのですから、あなたはお喜びなさなければなりませんわ。あなたの天幕をこの七年の間、蜂の巢や紅雀の巢のやうにきちんと整へておいたのは私ですもの。若しもコンチユバー様がエメンに私のやうな女王様をお持ちでしたら、私達を迎へるのにこんな毛氈を並べては置かないでせう。(カーテンを引く。開く)地の上に新しい土が盛つてありますよ。それから深い溝も……墓ですわ、ナイシ様。深い深い墓ですわ。

ナイシ(進み寄つてカーテンを後に引く。墓が見える)

これがエメンでの我々の家だ……山の麓に旨く掘つたものだ。倒れた木でかくれてゐる。ファーガスの來ぬうちに我々を殺して埋めやうと云ふのだらう。

デアアダア

わたしを連れて逃げて下さい。……わたしを連れて岩の影にかくれて下さいませ。夜が速かに更け

て参りますから。

ナイシ(きつとなつて)

俺には弟達を残して行くことは出来ない。

デアアダア(烈しく)

あの方はわたし達二人が嫉ましいのでござりますわ。楽しく遊んだ場所へ逃れませう。丈の高い羊齒の中に一緒にかくれておるのはよい事ではござりませんか。(左の方へ彼を引つ張る)林の中に聞き馴れぬ言葉が聞えますわ。

ナイシ

それはコンチユバーの下における他國の闘士に違ひない。俺は來る途中で奴等の歩いておるのを見た。

デアアダア(彼を右手の方に引つ張る)

こちらへいらつしやるませ。シッ!ナイシ様。

ナイシ

まだまだ澤山にゐる。……我々は取圍まれたのだ。だがエンリもアーダンも俺の側にはおらぬ。多くの戦に勝つた我々三人が、一緒に死なれないのは辛いことではないか?

デアアダア(ぐつたりと地上に倒れる)

疾く過ぎ去つて行つたあのアルバンの日のやうな幸福な日を、たとへ誰も持たないにしましても、開かれた墓の傍のこの場所にわたしとあなたのおりませぬのは、辛いことではござるませんか。

ナイシ

とこしへにあれ等の日を失つたのは情ないことだ。だがすべてのことが速かに去るのはよいことだ。何故なら俺があゝの墓に入れば、お前はすぐ泣くのに倦きて安樂になれるからね。

デアアダア

あなたのお言葉の正しいかどうか分りますまで、わたしはこゝには留つておりませぬ。

ナイシ

コンチユバーは我々三人を今夜殺すのだ。そして二三ヶ月のうちに、彼奴はお前と一緒に歓迎されながら歩き廻るだらう。

デアアダア

わたしは此處にはおりませぬ。

ナイシ(荒々しく)

あれを傍へよせつけぬが一番いゝ。そして時が來たらドンネガルの西の何處かへ行くがいゝ。お前はそこでたそがれ時の獨り寝の淋しさや、目醒めた後の晝中の淋しさに慣れるだらう。

デアアダア

死ぬより辛いことを仰言いますな。

ナイシ(稍々無分別に)

一つ言ひ残したことがある。若しも雲の端で雲雀がとさかを上に向け、郭公がび廻る日が西の國に來、お前に好きな男が出來たら、その時にはお前がいつ迄も泣き暮しておるのを、俺が喜んでると思つて呉れるな。

デアアダア(彼を見やうと振り向いて)

若しも死ぬのが私でしたら、ナイシ様、あなたは代りの女をお取りになられますか？

ナイシ(大層悲しげに)

この世を去ることの辛いことゝ、この世の中にお前をたゞ一人、嘆くために淋しく残しておくのもつと辛いことだといふことの外、俺は何にも知らない。

デアアダア

あなたが死なれますときにはわたしも共に死にますわ。エメンであなたと生死が御一緒に出来ることゝ思はなければ、わたしはアルバンからは参りませぬ。……然し今夜はあなたは髪な、いつもとは似合はぬことばかり仰言いますのね。

ナイシ

愛しあつてゐる二人の友を割くには、土を開いた新しい墓ほどよいものはない。

デアアダア

それ程よいものなれば、墓が閉ざされる時にはわたし達二人を、墓はとこしへに一つにするでござるませう。そしてわたし達は疲れることも、年を取ることもなく、心に悲しみもなくなるでせう。

コンチュバー(右手に現はる)

よくいらつした。ナイシ。

ナイシ(立つて)

どういたしました、コンチュバー。お目にかゝれてこんな嬉しいことは御座るません。

コンチュバー(温和に)

他の部屋の仕度が出来る迄、こゝにお出でを願ふのを悪く取つて下さるな。

ナイシ(叫ぶ)

私達はあなたの用意した部屋を知つてゐる。私達は何故あなたがあなたの印と、ファアガスをアルバンにやつて北に彼を止めておいたか、(カーテンを開いて墓を指さしながら)又何故私達の前にあの墓を掘つたかを知つてゐる。さあ何の用があつてこゝへ来たか聞かして貰はう。

コンチュバー

わしはデアアダアを見に来たのだ。

ナイシ

彼女を見る。貴様は巧い鳥飼ひだ。旨く擇んでアルバンから彼女をおびき出した。彼女を見る。だがいゝか、見終つたら俺には貴様が王だらうが、貴様の斑な鷺鳥のやうな首、絞める十本の指があるぞ。

デアアダア(二人の間に入つて)

シイ、ナイシ! コンチュバー様が仲直りをするのかも知れませんが……氣にかけて下さいますな、コンチュバー様。ナイシにも怒る理由がござるますから。

コンチュバー

怒つたつて構やしない。一度呼べば林の中から闘士が来るのだから……然しお前の言はうとするのは何だ、デアアダア。

デアアダア

あの墓の近くでは私達は三人の寂しい人のやうに思はれるのでござるます。新しく作られた墓の傍では、女の唇をいつも慈む男もおらなければ、又嫌な男を慈む男もおらないでせう。あなたのお墓

がエメンに搦られるのも遠くはござるません。しかし若しあなたがエンリとアーダンをお呼びになられて御一緒に夕飯をいたとき、あの墓をお埋めになられたならば、一層安樂に冥福が出来るでござるませう。そして今日からはあなたはわたし達のやうな四人の友をエメンでお持になり、御幸福になられませう。

コンチュエバー(しばらく彼女を見つめる)

それがお前から聞く最初の親しい言葉だ。デアアダア。お前のやうなものゝ話は心を和らけるに相應しいには違ひない。だが今夜お前の話をきくと、アルスターからお前を盗み去つたナイシが憎めなくなる。

デアアダア(ナイシに)

さ、ナイシ様、靜かにお答へなさいませ。今夜はわたし達はお友達になれませう。

ナイシ(荒々しく)

親しくなれゝば結構だ。お前の言ふ通りにしやう。

デアアダア(ナイシの手を取つて)

ではわたしをスリープ、フアドで育てゝ下さつたコンチュエバー様をあなたの友と呼び、王とお呼びなさいませ。

コンチュエバーがナイシの手を握らうとした時、背後に叫聲が聞える。

コンチュエバー

あの騒ぎは何んだ?

エンリ(背後で)

ナイシ……ナイシ……来てくれ。我々は欺かれた。やられる。

ナイシ

エンリが闘ひながら叫んでゐるのだ。

コンチュエバー

先づ勝はわしのもぢや。お前とわしの間には死の境が横はつてゐる。(退場す)

デアアダア(ナイシに縋りつく)

戦はありません。……私を棄てないで下さいませ。ナイシ様。

ナイシ

俺は弟達の所へ行かなければならない。

デアアダア 懇願するやうに)

わたしを棄てゝ下さいますな。ナイシ様。闇にまぎれて墓の後に匍ひ上がりませう。戦はあつても

エンリとアーダンが剣をとつたら、他國の騎士は斃されませう。

叫聲が聞える。

ナイシ(荒々しく)

俺にはアーダンの叫び聲が聞える。弟達から俺を引き離してくれな。

デアアダア

わたしを棄てて下さいませ。ナイシ様。切ない思をさせてたゞ一人わたしを残して下さいませな。

ナイシ

俺は弟達を棄てることは出来ない。王に反抗したのはこの俺だから。

デアアダア

わたしもあなたと御一緒に参りませう。

ナイシ

お前は来てはいけない。俺が戦ふのをお前は止めて呉れるな。(少し亂暴すぎる程彼女を側に突き飛ばす)

デアアダア(感情を抑へて)

では弟達の所へお出でなさいませ。七年の間といふもの、あなたは親切でござりました。然し死のつれなさが私達の間に参加しました。

ナイシ(驚いて彼女を眺めながら)

お前はつれない言葉を俺に聞かせて俺を死に向はせるのか?

デアアダア

私達は夢を見ておりました。然し今夜は夢から醒めました。僅かの中に私達は生き過ぎました。ナイシ様、私達が墓場の縁をさまよひながら、静な墓場を得ることが出来ませんでしたのは、情ないことではござりませんか。

エンリ(背後で)

ナイシ、ナイシ、俺達は襲はれた。やられた!

デアアダア

あの方々の呼んでいらつしやる所へお出でなさいませ。(暫し冷然と彼を見詰めてる)森の中では酷い死がエンリとアーダンに迫っておりますのに、うろくしたりお喋りばかりしてゐてお恥しくはござりませんか?

ナイシ(狂暴的に)

男だけなら彼等は酷い死に方をしまし。愛する女が一番残酷だ。若しも俺がこの先き生きのびたら、西や東をさまよつてゐる時俺は出會つた女を呪つてやらう。女に美しさを與へた太陽をも、それから女の上衣を赤く染めた茜あかねやべんけい草をも呪つてやらう。

ディアダア(苦々しく)

ナイシが死に際に物笑ひになつたとお喋りをするものが此處におらないのが、わたしには何よりも嬉しうござるます。

ナイシ

噂をするものは多くはないだらう。お前の眼の中の嘲りは、今宵エメンの地を掘り下げた墓で斑になるだらうからな。(退場す)

コンチユバー(外で)

ナイシだ。やつつけろ！(騒ぎ。ディアダア、ナイシの外套の上に着くまゝ。コンチユバー忙しげに入り来る)お前を盗んだ三人は死に類してゐる。ディアダア、今日からはお前はエメンでわしの妃だ。

人々の慟哭する聲が外に聞える。

ディアダア(途方にくれ、且恐怖にかられて)

私は女王にはなりません。

コンチユバー

嘆きたいのなら暫く嘆いてゐるがよい。然しお前が老人の、淋しい、しかも王である者を憐れむ日の来るのは長いことではない。……お前はわしを恐がるには及ばない。わしはアルバンでお前の友達であつた三人を、お前が憐れむのを喜んでおるではないか。

ディアダア

わたくしは憐れんでおります。……ナイシ様のことを考へますと、王様のお胸に齒を立てますことが出来る程、わたしはナイシ様を憐んでおります。

コンチユバー

わしは憐みは酷いものだといふことを知つてゐる。わしに對するわしの憐みがナイシを殺すやうになつたのだからな。

ディアダア(益々荒々しく)

つれないわたしの言葉が、生の終りまで、時の終りまで、類のないやうな死に方をナイシ様におさせいたしました。(慟哭する)然しナイシ様の唇をわたしの頸から、わたしの頬からとこしへに失つたこのディアダアを誰が憐みませう？ふなの木が銀色になり、銅色になり、とねり、この木が結廬

な黄金色になつた時、森の中でたそがれと共にナイシ様を失つたこのディアダアを、誰が憐んでくれませう。

コンチュエバー(送方にくれて)

わしはお前を慰め、介抱する道を知つてゐる。禍を分け持つたこのわしは墓に入るのがわしで、ディアダアがわしの上で泣き、そして年寄で淋しいのがナイシであればよいとわしは今夜は思ふのだ。

慟哭開ゆ。

ディアダア(悲しきの余り狂暴になり)

淋しいのは私です。このディアダアは年寄る迄生きてはおられません。

コンチュエバー

お前は永くは淋しくない。わしは七年の間、「アルバンの森にゐればディアダアは幸福だ。」と言つてたし又、「北から濕つた葉や枝が押し流されて来る夜、今宵ディアダアはどの様に眠つておるだらう。」つて言つてたのだからな。身も心も嘆きに委ねて、わしが生命をそゝいだものを破つてくれるな。喜びも嘆きも東風に燃える藁のやうに、燃え失せてしまふのだからな。

ディアダア(彼の方を振り向いて)

わたしとナイシがスリーブ、フアドから北に行つた時、そしてアルバンに向けて帆を張つた時、あ

なたの嘆きはそんな風でしたのですか？

コンチュエバー

限らない悲みが一つある——それは年老ひて淋しい事だ。(非常に懇願するやうに)然しわしとお前は豎琴を奏でたり、老人が黄昏時に話をしたりして、エメンでやゝ平和を得られやう。わしはわしら二人の爲に部屋を造らせた。ディアダア。壁には金を塗り、天井を青銅ではらせた。東の國には、エメンでお前が持つやうな美事な家を持つてる后は一人もない。

兵士(駆け入り)

エメンは焔に包まれてゐます。ファアガスが歸つて参りました。そして到る處に火を放つております。さあお越し下さい。コンチュエバー様。さもないとあなたのお國は滅されてしまひます！

コンチュエバー(怒つたが再び王らしく)

ウスナの息子達を埋めてしまつたか？

兵士

あの方々は墓の中におります。然しまだ土はかけてはありません。

コンチュエバー

では見やう。テントを開ける。(兵士テントの後の方を開いて墓を示す)わしの闘士は何處へ行つた。

兵士

闘士達はエメンに参りました。

コンチエバー(ディアダアに)

お前を害する者はない。わしの戻るまでこゝにおいで。

兵士と共に退場す。ディアダア暫くあたりを見廻す。それから靜かに墓に近寄つて、墓の中をのぞき込む。彼女は地上にうづくまり、身體を前後にゆすつて軽く慟哭す。最初は彼女の聲は聞えない。然し次第にはつきりして来る。

ディアダア

あなた方お三人は近づく老年をも死をも御覽になりませんか——丘の頂の火が消され、星ばかりが私達の友であつた時に私の友達であつたあなたは。私は今宵から憐みのない憐みである私の思ひを、樺の木や乾いた石の影にあなた方が竿や上衣で、わたしの爲にさゝやかな天幕を作つて下さつた昔にかへしませう。けれど今日からは天幕を自分でつくり、雨で結ほれた髪を自分で梳かさなければなりません。

ラバーハム及び老婆忍び足て右手より登場す。

ディアダア(二人に氣がつかずに)

暗がりにはうづくまつておりますのはディアダアでございます。エメンのあなたのお墓で悲嘆にくれておりますのは、わたし、ディアダアでございます。

老婆

あんなに浮々していらつしやつたディアダア様が、嘆き悲しんでおられるのでせうか？

ラバーハム

え、あの人達のお墓の上で泣いておられます。(ディアダアの傍に行く)

ディアダア

今日からはあなたの石に向つて嘆いておりますのが、わたしの運命でございます。私は海邊の小さな港を照してゐる星を慕ふやうに、あなたをお慕ひ申して泣きつゞけませう。

ラバーハム(前へ出て)

お起きなさいませ。ディアダア様。そして誰も氣のつかないうちにお逃げ遊ばしませ。わたくしはあなたに隠れ家と、あなたをお護するお友達とをお探し致しませう。

ディアダア

ナイシ様とお別れして何處へ行かれませう？ ナイシ様がおらないならば、森も海邊も何になりませう？

ラバーハム(大層言葉巧みに)

若しもさうしていらつしやりたいのなら、日當りのよい所を探して上げますからお出でなさいませ。そこではあなたは嘆きの女王と呼ばれて大きな不思議になりませう。そして夏が参りますれば坐つて休息したり、夢をみたりして誇らかに初めませう。

デアアダア

夏に力強く響いたのはナイシ様の聲でござりました。——あの方の聲は吹く笛の音よりもうるはしうござりました。然し今日からはとこしへにあの方の聲は聞かれません。

ラバーハム(老婆に)

わたし達の言葉は耳に入れません。起すのは困難でせう。

老婆

若しも私達に出来ませんければ、王様がお姫様のお傍にお出でになられてお起しいたすでござるませう。どうしてファーガス様がお手向ひ出来るものですか？

ラバーハム(デアアダアに手を觸れて)

あなたはまだ女の若さを澤山にお持になつておられます。嫌な男の傍でお暮しになられまするか、西か北に参られて獨りほつちでお暮しになられますか、宜しい方をお擇びなさいませ。

デアアダア

エンリやアーダンの亡くなられた後でわたしは生きてはおられません。ナイシ様のお亡くなりになられた後では、私はこの世に生きてはおられません。

老婆(興奮して)

ごらんなさい。ラバーハム？ レッド、ブランチの御殿から光りが出ました。コンチユバー様とその御家來方が、お姫様の御婚禮のために松明をともし大急ぎで参られます。お姫様の三人のお友達に燈火を投げかけるでせう。

デアアダア(はつとして)

さあ三人のお友達に土をかけませう。ナイシ様をエンリやアーダンと一緒に埋めませう。エメンの誇だつた三人を。(土をかけながら)三人のうちでナイシ様が一番でした。多くの中から選ばれた人の又選ばれた人でした。ナイシ様、あなたの運命は清らかな死でござりました。鶉や千鳥の仲間になつて、幾夜もく暗闇の中であなたとわたしとは囁き合つたのですもの、どうして私はあなたをお忘れすることが出来ませう。幾夜もくルアドの谷の開かれた林の間から二人して星を眺めたり、丘の端に身を横へてゐる月を眺めたのですもの、どうして私はあなたを忘れることが出来ませう。

老婆

コンチユバー様が参られます。わたくしには焰のきらめきが王様の召物を照してゐるのが見えます。

ラバーハム(熱心に)

お起きなさいませ。ディアダア様。そしてファーガス様のお傍へいらつしやるませ。お出でになりませんと、王様の奴隷にいつまでもおなりになられます。

ディアダア

この世を焦し荒し去つたナイシ様を、わたしは棄てる事が出来ません。空には光がなく、地には花の生じない時に、わたしは去ることは出来ません。然しとこしへに去つたのはナイシ様だと申しませう。

コンチユバー(後ろで)

こゝにゐた。少し後におつてくれ。(コンチユバーが入つて来たとき、ラバーハム及び老婆は左手の蔭の所に行く。興奮して、ディアダアに) わしが黒焦けになつた棟木や、焼け焦けた匂や、蔵の中にしまつておいた山の様に澤山ある王冠をエメン、マチャに残して来たやうに、ナイシを棄てゝ行かう。

ディアダア(あたりの様子に一層氣づく)

王冠もエメン、マチャも今は何になりませう。それらの王冠に光榮を與へた人は此處に、今宵わた

しの寢床になるこの砂利の上に横つてゐるのですもの？

コンチユバー

ナイシのことを言ふのはよしてくれ。わたしはエメンが減んだから、お前を連れてダンディルガンに行かうと思つて来たのだ。

コンチユバーは彼女に近寄る。

ディアダア(彼を遮切るやうな調子で)

とこしへに若人であるナイシの傍を少しお退きなさいませ。土や枯草の塚の中にわたしがお入れした白い身體から少しお退きなさいませ。——終りが参りましたらわたしにも隅を分づ塚でござるます。

コンチユバー(荒々しく)

こゝで泣いて氣狂ひになるより、立つてわたしと一緒にお出で。

ディアダア

あなたこそ物狂ほしいお話をなされます。あなたはあなたの兵士の所へお戻りなさいませ。コンチユバー様。そしてあなたの名を尊敬なされる會議へお出でなさいませ。こゝではあなたは老人で愚者に過ぎませんから。

コンチユバー

わしは愚者かも知れないが、嘆きと多くの者の生命とで購つた物を失はぬほどの恰憫さはある。

叫び聲が聞ゆ。

ディアダア

わたしに觸つて下さいますな。

コンチユバー

お前に觸れる手が他にもあるよ。わしの闘士は林の中に放たれてゐる。

ディアダア

暗い夜開いてゐる墓に向つて闘ふものがありませうか？

ラバーハム(熱心に)

森の中に足音が聞えます。わたくしにはフアーガスやその部下の叫び聲が聞えます。

コンチユバー(怒り狂つて)

フアーガス如きに止められるものか。たとへわしは敗れ老ひたりといへ、彼よりは力が勝つておるわ。

フアーガス(ディアダアの傍に入り来る。赤い光が墓の後に見える)

わしはエメンを破つた。さあいつまでもお前を保護してやるぞ。ディアダア。知らずしてナイシを墓に導いたのはこのわしであつたがな。

コンチユバー

貴様にはディアダアの保護はさせぬわ。わしの全軍は集りかゝつてゐるからな。ディアダア、起て、お前はたしかにわしのものだ。

フアーガス

わしが邪魔をしてくれる。

コンチユバー(荒々しく)

ナイシとその兄弟を刃の錆にしたからには、誰も容謝はせぬぞ！ エメンに於て怒のために死を早めてゐたわしを七年間見ておつたに、フアーガス、貴様はわしに叛くのか？

フアーガス

さうだ。わしは盗賊と反叛者に叛ふのだ。

ディアダア(立つてエメンの光を見る)

わたしは苦痛のために身を引き裂かれるやうでござります。ですから愚者の口争ひはお止め下さいませ。(ふり返る)わたしには暗い夜の闇を貫いて、エメンの焔が燃え上がつてゐるのが見えます。

わたし故に女王や軍隊のおつた所が淋しい石牆になり、そこに鼯鼠や山猫が叫び廻るでせう。また滅んだ町や、狂ふた王やとこしへに若い女の話が語り傳へられるでせう。(見廻す)林は裸になり、荒れ果て、月が照つてゐます。小さい月よ、アルバンの小さい月よ、ラオイの谿向ふの森に来て、互に快く眠つてゐる二人の戀人ナイシとデアダアとを隅なく求めるとき、今宵も、翌日の晩も、いつの夜も永くお前の心は淋しいでせう。

ファーガス(コンチュエバーの右手に行き、そして囁く)

退いたらいいだらう。それでないとお前は、氣の狂つた女王と争をしたといふ汚名をきるぞ。

コンチュエバー

氣の狂つてゐるのはわしだ。エメンは焔に包まれ、デアダアは狂つてゐるから、わしの心は破れてしまつた。

デアダア(高い靜な調子で)

わたしははき古した泥だらけな靴のやうに、悲みを棄てしまひませう。わたしは多くの人に羨まれるやうな生活を送りましたから。エメンの大廣間に王様方が坐つておられますが、わたしは王様方を不安にさせたのは賤しい生れではありませんでした。武勇にかけてはナイシに並ぶものがありません。然し賢い王様に擇ばれることも、詰らないことではありませんでした。髪の毛の灰色にな

るのや、齒のゆるむのを免れることは容易ではありません。(勝ち誇れる體で)清い森でわたし達は選ばれた生活をいたしました。それから墓の中ではわたし達は安全です。……

コンチュエバー

彼女は自殺しやうといふのだらう。

デアダア(ナイシのナイフを示して)

あなたがナイシの青春をとこしへに閉ぢた牢獄を開く小さな鍵を、わたしな持つております。お退きなさいませ。コンチュエバー様。(半ば墓の方を向く)嘆くことが豫言されておりましたけれど、私の運命はいつも大きな喜でござりました。然しわたしはあなたと御一緒になるために、冷い所に行かねばなりません。ナイシ様。あんなに度々わたしの頸を暖く抱いて下さつたあなたの御手も、今宵は冷いでござるませう。……お聞えにならないあなたのお耳に、お話しいたしますのは情ないこととござります。コンチュエバー様、エメンで今宵あなたがなさいましたことは、情ないこととござります。然し生の終るまで、時の終るまで、喜であり勝利であることが一つとござります。

心臓にナイフを刺し通し、墓の中に落ち込む。コンチュエバー、ファーガス前に入る。赤い光は薄らぎ、舞臺非常に暗くなる。

ファーガス

四つの白い身體が共に並べられた。愛蘭の四つの光明が消えた。(劍を墓の中へ投ぐ)お前達を——いつも親しかつたお前達四人の友を——庇^{かば}へなかつた劍だ。エメンの焰は消えた。デアアデアは死んだ。然し悲むものは一人もゐない。これがデアアデアとアスナの息子達の運命^{さだめ}なのだ。コンチユバー、今夜はこれで分れやう。(退場)

ラバーハム

あなたのお休みになられる小屋が御座ります。コンチユバー様。ひどい夜露でござりますこと。

コンチユバー(老人の聲で)

連れてつてくれ。わしは行手が見えぬ。

老聲

こちらでござります。コンチユバー様。(二人退場す)

ラバーハム(墓の傍で)

デアアデア様はお亡くなりになりました。それからナイシ様もお亡くなりになりました。若し樫の木や星が悲みのために死ぬことが出来ましたなら、今宵エメンは暗闇になり、醜い裸の地となるでせう。

(幕)

シングの研究書

- Bennett, Charles A.: in *Yale Rev.*, n. s., 1, 1912.
 Bickley, Francis: J. m. Synge and the Irish Dramatic movement, Bost., 1912.
 Blake, W. B.: in the theatre, 13, 1911; in the Dial, 50, 1911.
 Bourgeois, Maurice: John M. Synge and the Irish theatre, Lond., 1913.
 Browne, S. J.: in *A Guide to Books on Ireland*, Dublin and N. Y., 1912.
 Figgis, Darrell: in *Fortnightly Rev.*, 96, and the *Forum*, 90, 1911; in *Studies and Appreciations*, Lond., 1912.
 Gregory, Lady Isabella Augusta: in *English Rev.*, 13, 1913; in *Our Irish theatre*, N. Y., 1913.
 Hoare, J. E.: in *University Mag.*, Toronto, 10, 1911, in *North American Rev.*, 194, 1911.
 Howe, P. P.: J. M. Synge, a Critical Study, N. Y., 1912; in *Dramatic Portraits*, N. Y., 1913.
 Huneker, James G.: in the *Pathos of Distance*, N. Y., 1913.
 Lowther, George: in *Oxford and Cambridge Rev.*, 25, 1912.
 Masfield, John: in *Contemporary Rev.*, 90, 1911.

Ireland in fiction: a guide to Irish novels, tales, romances and folk-lore.
 Lond. 1916.

Montague, Charles E.: in Dramatic Values, N. Y., 1911.
 O'Neill, George: in American Catholic Quarterly, 37, 1912.
 Quin, John: in the Outlook, N. Y., 99, 1911.
 Roy, James A.: in Anglia, 37, 1913.
 Sherman, Stuart P.: in the Nation, N. Y., 99, 1912.
 Taylor, Herbert: in Manchester Quarterly, 29, 1910.
 W. yegandt, Cornelius: in Irish Plays and Playwrights, Bost., 1913.
 Yeats, W. B.: in the Cutting of an Agate, N. Y., 1912; in the Forum, 46, 1911.

Irish fairy and folk tales

不許複製

【定價貳圓參拾錢】

勝雄藏三
 誠由和
 江藤井神
 藤後新福
 者者者者
 譯發行印刷製

東京市牛込區橫寺町四三

閣英聚發行所

振替東京四七八六九

電話牛込四六二

大正十二年七月五日印刷

大正十二年七月卅日發行

スタンダール著・井上 勇 譯

戀愛論

全二冊 四六判黒ダツク布装
定價 第一部 壹圓九拾錢
第二部 壹圓六拾錢
送料 十七錢

戀愛問題
に就き八
面より觀
察批判せ
る世界的
名著

戀に就いて

- 一、熱情戀愛……全身を戀愛に投じて陶酔し、肉體の快樂の如きは殆んど忘却してしまふのであるが、虚榮と金錢に對してのみしか心を動かすことの出来ない、人人の夢にも知らぬ快樂を知つてゐる人人なのである。
 - 二、趣味戀愛……それは陰影までこめて總てが薔薇の色に塗り込まれてゐなくてはならない、繪巻物の様な戀である。冷たいが、しかし、美麗で氣品の高い戀である。
 - 三、生理的戀愛……狩に行く、林の中に、逃げ潜んでゐる美しい、いかにも生々とした百姓の娘に出會ふ事がある、この様な快樂に立脚した戀愛は年十七になれば知つてくる。
 - 四、虚榮戀愛……自分の驕奢を示す必需品として美しい馬を持つてゐると同様な氣持でもつて、世にときめく派手な婦人を所有することを戀い願ふ人人の心である。
- 以上の四種の區別よりスタンダールは八種又は十種の「味はひ」に分け皆、同一法則によつて生れ、生活し死し、又は不滅を現すのである。

終